言語社会研究科　博士論文要旨

著　　者　　丸川　哲史
論　文　題　目　　台湾における二.二八事件前／後の文学空間
　　――脱植民地期化と祖国化の交錯する磁場――
学位取得年月日　　2006 年 5 月 11 日

本論文が目指すのは、台湾の光復初期における文学作品及び新聞の副刊(文芸欄)の動向を主たる材料としつつ、当時の国民党体制に対して批判的スタンスとっていた知識人、文学者の動向を明らかにすることである。

光復は紛れもなく台湾にとって一大事件であったが、さらに二.二八事件の発生は、大きな影を台湾の人々に大きな影を落とすことになったことは、既に多くの研究者によって指摘されるところとなっている。ただある一面として、その後の一九四七年の二.二八事件から一九四九年の国民党政権の全面撤退に至るまでのプロセスについて、九十年代後半まで、研究が進捗していなかったかの観があった。それは、本論で触れるように、台湾がいまだに白色テロという歴史的事件について、学問的に評価する軸がいまだに台湾社会に根付いていないからではないか、と考えられる。この期間、大陸から来た進歩派の知識人や楊逵の活動など、左派系の文化人の活動が大きくなっていることもあり、そのためにこそ四十九年春の四.六事件という白色テロの前触れともなる弾圧事件が引き起こされたのである。

これまでの研究では、二.二八事件から四十九年にかけて、つまり本格的な白色テロが発動されるまでの時期について、知識人は全く沈黙させられていたような印象をもたらしていた。だが本論で展開したように、当時は、アメリカ合衆国の動向にも左右されて、二.二八事件以後にも、むしろ進歩的な文化運動(新文学運動にかかわる議論への胎動)が進められる条件が存在していたし、実際にその可能性が議論されていた。この時期、台湾における文化状況は、一定程度、国民党政権に批判的な活動についても、それを黙許しておく傾向にあったと言えるのだ。本論考は、二.二八事件から一九四九年の四.六事件にかけて、大陸から入ってきた進歩的知識人と台湾側知識人との合作が存在していたことを内在的に検証しつつ、さらにそこでの議論――つまり本論考において、「脱植民地化」と「祖国化」と呼ぶべき文化実践――が抱えた問題を解析することを主眼とするものである。

光復初期において最も大きな矛盾とは、二.二八事件の原因ともなり結果ともなっていた、主に長官公署サイドよりなされた「奴隷化」論の延長と蔓延にあったと思われる。それが、台湾社会の中で特に本省系知識人を「沈黙」、及びルサンチマンの方に追いやっと考えられる。当時は、大陸から来た接収員の不正や、横柄な態度などが大きな問題となっており、大陸と同様にして、国民党の支配体制が不満の対象になっていた。また台湾においてはさらに、公的言語の転換による日本語世代への文化的打撃も、絡んで来るだろう。このような中、二.二八事件が発生したわけであるが、しかしその後も、大陸の進歩派の知識人と台湾知識人とは、一定の合作の端緒を掴

もうとし続けていた。二.二八事件による弾圧から一定の緩和がなされることになった同年、一九四七年夏ごろから、象徴的な意味でも戦前からの文学者、楊逵の文化活動が再開され、また大陸の進歩派歌雷による『新生報』「橋」副刊が始まることになる。そして一九四八年の頃から、「橋」副刊は、楊逵や他の若い世代の文学者、知識人が頻繁に登場する文化空間を構成したのである。

だがそこには、様々なすれ違いもあった。そのすれ違いの主たる要因として、台湾における「日本」の影をどのように処理するか、という「脱植民地化」にかかわる議論において、大陸側の知識人は、日中の「総力戦」の経験によって日本観を作っていたことが一つの特徴として挙げられるだろう。しかし台湾人側にしてみれば、植民地支配による強制的共生を強いられた歴史にかかわる記憶に関して、自らのアイデンティティーを一方的に大陸の基準に合わせることに抵抗感があったものとも考えられる。その意味で、大陸の進歩派の知識人と言えども、「奴隷化」論を主導した国民党の勢力と混同されてしまいかねない文化状況が発生していたようである。

当時の進歩派の大陸系知識人は、大陸中国におけるの抗戦文化を台湾に紹介することに腐心していたが、既に当時においても「抗日」は、国民党の差別的な統治体制を正統化するイデオロギーと化していたことが、また大きかったのではないか、と思われる。また抗戦文化の導入は、根本的に、多くの人間が日本側に立たされていた台湾人にとって、微妙な感情記憶を孕んでいたことも予想される。そして結果的に、そのような両者の齟齬が解消される時間的余裕も、またその後の時代の条件にも恵まれないまま、全面的な白色テロの時代が到来してしまったのだ、と結論づけられるわけである。

以下、各章のテーマにかかわる先行研究の整理と内容の要約

第一章：光復後の文化空間――楊逵を中心として――

第一章では、光復直後から一九四九年の春までの台湾における文化状況を一瞥するために、一つの定点として主に楊逵の活動を追いかけることにした。先行研究としては、黄恵禎『楊逵及び作品研究』(麦田出版 1994)があり、大体の光復後の楊逵の活動をフォローできるが、特に二.二八事件以後の叙述については、やや表面的なきらいがあり、さらに楊逵が志向した大陸知識人との連係については、ほとんど触れられていない。

光復直後、特にその中での知識人の活動については、中国への復帰をどのように見ていたかということは、実に決定的な論点であるように思われる。期間を二.二八以前に定めるならば、この間の歴史については、蘇瑤崇主の手による『最後的総督府一九四四-一九四六年終戦資料集』(晨星出版 2003)が旧統治者側の見方を伝えており、興味深い。さらに、このころの台湾人による自然発生的な文化活動の隆盛については、曾健民『破暁時刻的台湾－八月十五日後激動的一百日－』(聯経出版 2005)によって多くの知見が与えられている。

この後に発生する二.二八事件は、光復後の台湾にとって、とてつもなく重要な時代の画期となったことは、申すべくもないことである。しかしそのような二.二八事件前後の歴史状況とい

うものについて、さらにその中でも文学活動を担う知識人の動向については、八十年代半ばまで、ほとんど学術的な蓄積が為されることがなかった。その要因は、紛れもなく一九四七年の二月末に発生したいわゆる二.二八事件、そしてさらに一九四九年の春から本格化する社会主義者、及び社会主義者と目された人物な対する白色テロによって、その時期の歴史が長らく政治的タブーとなっていたからである。

そのような二.二八事件を挟んだ光復初期とは、中国近現代史の視点からするならば、台湾が中国へと戻って行く「祖国化」の契機として考えられることが出来るし、さらに台湾の視点に立つならば、また日本の植民地統治の文化的影響からどのように自身を解放していくかという、いわゆる「脱植民地化」の契機が強く意識された時期ということになる。

このような光復後のあり方について、文化に携わる知識人は、どのような行動を取っていたのか――八十年代から九十年代にかけて従来の見方では、ほぼ二.二八事件以後において文化活動がほとんど抑制されることになった、との説明も多かった。黄英哲の『台湾文化構築一九四五-一九四八の光と影』(創土社 1999)は、陳儀によって設立された台湾編訳館とその館長を務めていた許寿裳の動向について、綿密な研究を為しており、光復直後の台湾における文化運動の可能性を叙述している。しかし黄の叙述は、やはり陳儀の失脚にともなう編訳館の解体をもって台湾における文化運動の終息を見ている観があり、一九四八年における台湾における文化運動の活況について説明を加えていない。

その意味でも、一九四七年から一九四九年における台湾の文化状況を全面的に世に顕すことになった陳映真他編による資料集『人間――思想与創作創刊』「一九四七-一九四九台湾文学問題論議集」（人間出版 1999）と藍博洲のルポ『天未亮――追憶一九四九年四.六事件（師院部分）――』(晨星出版 2000)及び『麦浪歌詠隊――追憶一九四九年四.六事件（台大部分）――』(晨星出版 2000)は、その時期の台湾の文化状況が如何に可能性に満ちていたかという点において、多くの示唆を与える仕事となった。特に前者の資料集「一九四七-一九四九台湾文学問題論議集」は、第四章で深く触れることになるが、当時の『新生報』「橋」副刊における楊逵の影響力を鮮明に打ち出している。この資料集は、台湾文学者、林瑞明、彭瑞金などが、『文学界』(一九八四年夏号、一九八五年春号)などで紹介した「橋」副刊における楊逵の位置づけに対する反論として、大陸の進歩派との合作の状況を大きく紹介するものとなった。

さて本章で紹介したのは、楊逵が二.二八事件の収束後に釈放され(一九四七年八月)、それ以後どのような活動を行っていたかについてのアウトラインである。興味深いことは、楊逵の行動は、大陸の進歩派知識人たちだけではなく、さらに戦前において皇民化の時期を過ごしていた台湾の文学青年たちの指導者となって、光復後の台湾の文化状況への台湾人の若手の登場を促していたことである。

いわば、楊逵の役割は、横軸としての大陸との関係、そして年下の世代の台湾人青年への結びつきという縦軸への考慮も欠かさなかったという意味でも、実に重要な位置にあったと言える。そしてさらに言えることは、そのような楊逵の活動は、他の筆を折った日本語作家たちとの対比において、たとえ少数派であったとしても、一つの代表的な活動のパターンを歴史に残した、ということとなる。

第二章：光復後の脱植民地化と「省籍」問題――文学作品の表象分析を中心にして――

光復後、台湾に来た国民党の統治者集団は、内戦の影響を受けており、台湾人に対して接収者として振舞う光景が多々見られた。例えば、上級の政府機関になればなるほど、台湾人はそのポジションから排除されるような差別的な体制が敷かれることになったのである。また文化政策においても、台湾の個性を無視した政策決定が為されていた。

戦後の台湾文学について、台湾におけるそのような経験も含め、冷戦による内戦体制というものが固定化される中で、台湾文学の個性を位置づける試みは、八十年代においては、国民党当局の検閲体制もあり、むしろ日本の研究者において為されることになった。台湾文学の歴史を戦前から総括した松永正義の「台湾文学の歴史と個性」(『彩鳳の夢』研文出版 1984)は、特に戦後(光復後)の文学についても、大陸の動向と一定の関数関係にあること、台湾文学そのものが、冷戦体制(内戦体制)において大陸の中国現代文学と相互補完的な関係にあることを主張している。松永の論点は、今日においても有効に機能することろがある反面、台湾における研究においては、九十年代以降、むしろ台湾文学を中国文学の影響から切り離す志向も出てくることになった。

それは、葉石涛『台湾文学史綱』(文学界雑誌社 1996)における歴史叙述においても、端々に散見される構えである。例えばそれは、この葉の『台湾文学史綱』における光復直後の、台湾に乗り込んできた国民党軍兵士に関わる描写に典型的である。装備が劣った兵士に対して台湾人が失望の感情を持ったとする叙述は、むしろ後々定式化されたものとも言える。それはいわば、国民党統治下で生まれた反国民党の感情が、後の歴史叙述に撥ね返っている例として、考えることができるだろう。

本章は、むしろ当時、光復から二.二八事件までに書かれた第一次文献によりながら、当時の文学作品の端々に現れていた「祖国」(国民党政権によってもたらされた「祖国」)への違和感について、どのように表現しようとしたのか――その無意識の構造を明らかにしようとした。当時、台湾人男性、台湾人女性、そして大陸から着た中国人男性を登場させた作品が多く書かれていた。そしてその中で、虐げられた「女性」のイメージが「台湾」の運命に重ねがきされるタイプが多く見られた。すなわち本章は、光復初期におけるテキストを解読する中で、台湾人男性知識人における精神史的側面の、特にその無意識的部分に触れることを目指している。当時の台湾人知識人が、どのように大陸中国人を表象しようとしたのか、またそれと連動して、かつての日本人及び日本統治のイメージをどのように自身の中で処理しようとしたのかを考察するものである。

このような作品群に対して、台湾の研究者、游勝冠は、「戦後台湾的反植民文学」(『台湾史資料研究(第三期)』1994/2）の中で、そのような女性を「植民地的支配に圧迫される台湾の象徴」として扱っている。このような見取り図は、一面としては正しいものでありつつ、しかし定義のレベルで国民党による統治を「植民地」という言葉で言い表すことができるかどうか、疑問点なところもある。さらに言えば、そのような「台湾」の暗喩として女性を登場されるのではなく、むしろリアリズムの手法で、当時の都市下層の女性を描いた呂赫若のような例も存在する。

近年、台湾ではポストコロニアル批評を基軸として、植民地と女性の表象を問題化する傾向は多く出されている。それは例えば呂赫若を扱った研究においても、陳芳明の論文「植民地与女性」

(『呂赫若作品研究』主編陳映真 聯合文学出版 1997)など、代表的な例である。しかしもう一方では、戦後台湾における文学の特徴について、大陸との関係が絶たれた側面を重視する論も、同時に提出されている。呂赫若が白色テロによって倒れた例など、政治的禁圧が台湾におけるリアリズム文学の欠如を作り出したとする論点が、陳映真の「論呂赫若的《冬夜》」『陳映真文集◎文論巻』(中国友誼出版 1998)によって出されている。

さらに日本植民地統治の影響について、それが光復後の文化空間においてどのように処理されようとしたのか――この論点は、光復後(戦後)の台湾の文学の特質そのものを議論することに繋がるようである。光復初期における文学テキストは、実に今後も多くの研究が重ねられなければならない領域であるものと思われる。光復後において、日本統治の「影」がどのように処理されようとしたかという論点については、第四章においてさらに詳細に展開した。

第三章: 二.二八事件以後の「沈黙」の意味――『国声報』「南光」副刊を中心に――

第三章では、時期を二.二八事件からの一九四七年の暮れまでと明確に区切った形で、この期間の文化動向を、台湾の知識人と大陸から来た進歩派との接触を基軸にして議論することにした。

二.二八事件は、確かに台湾の文化状況に大きな影を残すことになったと言える。しかしそれは、完全な禁圧状態ではなかった。政治状況からするならば、陳儀に代わった魏道明の赴任があり、検閲も含めた言論への弾圧は緩和されることになった。国民党政権がアメリカ合衆国とのパイプの太い魏道明を選んだ理由は、二.二八事件における血生臭い弾圧の後、当時の大陸における国民党政府がある程度の緩和措置を講じなければ、アメリカ合衆国国に見捨てられるかもしれないとの危機感を背景にしたものだった。この論点については、中村元哉による『戦後中国の憲政実施と言論の自由』(東京大学出版局 2004)が大きな示唆を与えてくれた。また、当時の国民党内部の派閥問題に関しては、大陸帰りの台湾人で要職に就いた、いわゆる「半山」などがむしろ台湾人に不評を買うなどの事態も指摘し得るところである。

先述したように、この時期における台湾の文化活動に関して、台湾人と大陸側の進歩派知識人の合作状況については、先述したように、陳映真・曾健民編による『人間』の「一九四七-一九四九台湾文学問題論議集」(人間出版 1999)がこの領域に関する注意を広く知らしめることになった。だがさらに、曾健民・藍博洲・横地剛編による『文学二.二八(光復五年史叢書二)』(台湾社会科学出版社 2004)が出されるに及び、二.二八事件が当時から文学的表現になっていたことが指摘されるなど、大きな研究上の進展がもたらされている。二.二八事件にかかわる文学表現で言えば、林双不編の『二.二八台湾小説選』(自立報系出版 1989)や許俊雅の編著による『無言的春天――二.二八小説選』(玉山社 2003)などが出されているが、それらの内容は、いずれも七十年代以降に再創作されたものが中心となっていた。その意味でも、二.二八事件にかかわる記憶は、後から作られたものと、当時リアルタイムに出されたものとの位相の差に注意を向ける必要がある。

本章に大きな示唆を与えてくれた先行研究として、さらに横地剛の『南天の虹』(藍天文芸出版社 2000)を挙げておきたい。本書は、光復後の台湾を訪れていた版画家・文章家の黄榮燦の台湾・大陸を跨いだ事跡にかかわる労作である。同書は、綿密な資料を元にして、当時の台湾にお

ける大陸出身の進歩派の活躍のあり様を論証し得ている。その上で、本章が目指したのは、そのような大陸出身の進歩派の活動にどのような積極性と時代的な制約があったのかを明らかにすることであった。

一つ言えることは、当時の半官半民の雑誌『台湾文化』などは、二.二八事件以降も、相当の程度、大陸における新文学的な要素を紹介するメディアとして機能していたわけであり、実は完全な「沈黙」は成立していなかったということである。さらにもう一方では、大陸出身で国民党の統治に批判的な進歩派も、様々な形で台湾の政府機関に近いところに食い込んでいた事実がある。そしてその中で、国民党政権に対する批判者としての機能を一定程度、果たそうとしていたのである。

彼ら大陸の進歩派は、総じて大陸における抗日戦争によって活気付いた抵抗文化を台湾にもたらそうとしていた。例として、高雄で発行されていた『国声報』の「南光」副刊などは、器としては国民党サイドの機関であったにもかかわらず、進歩の抗日文化を紹介するメディアとして機能し続けていた。また当時、欧陽予倩など、大陸の進歩派演劇人が台湾に来ていたが、様々な理由から、彼らの活動が十全に台湾に伝わったわけではなさそうである。そこでの困難の本質は、台湾の知識人からするならば、国民党の文化政策への不満が潜在的にあった場合にあっても、そこで大陸の進歩派と合作するのに、様々な調整が必要だったということである。

日本統治時代の台湾人は、中国大陸に対して敵対する立場に立たされていたということがあり、複雑な感情記憶が潜在していたものと考えられる。また当時は、国民党統治の正統性を喧伝する上でも、国民党サイドからする国民党版の「抗日文化」が強調されていたことも、「抗日文化」への台湾人の関心を低める結果を招いていたことが予測される。台湾の知識人と大陸出身の進歩が合作し、新文学的な気風をもたらすような活動が表立って始まるのは、やはり一九四八年の春からのようである。

第四章:二.二八事件後の新文学論争――『新生報』「橋」副刊の論争が示したもの――

二.二八事件前後の台湾における文化環境を考える際に一つの指標となるのが、魯迅受容に象徴されるように、台湾における新文学運動の流れをどのように見積もるか、という問題設定である。一つの例で言うならば、二.二八事件の影響による検閲の解除がなされようとした八月に始まった『新生報』の「橋」副刊の登場は、様々な紆余曲折はありながらも、その流れが実は途絶えなかった一つの証拠となっている。そこでは、大陸の新文学の動向、あるいはかつての台湾の新文学の伝統をどのように発展させるかということが、大いに議論されるところとなっていた。第三章でも触れたように、二.二八事件はそれ自体、大きな事件であり、台湾の知識人、文化人に大きな動揺を与えていたわけであるが、しかしそれを乗り越えたところで、新文学を復興させようとする流れは、実は途絶えていなかったのである。

ところで二.二八事件が台湾人にもたらした文化的影響について、特に今日の省籍矛盾の根源に二.二八事件の発生をおこうとする、何義麟の著作『二.二八事件―「台湾人」形成のエスのポリティクス―』(東京大学出版 2003)は、二.二八事件に至る台湾知識人側の動向を綿密に調査しており、二.二八事件解釈に大きな学的基礎を与えたと言える。しかしその反面、大陸からの影

響、特に進歩派の影響については、ほとんど取り上げていない。なかんずく、二.二八事件を越えて持続していた魯迅受容など新文学の流れについて、ほとんど触れておらず、バンランスの悪さも指摘できる。

先述した陳映真、曾健民、藍博洲など雑誌『人間』のグループ(さらに横地剛の仕事)による「橋」副刊への注目は、この時期(光復初期)の研究に大きな問題提起を行ったことになる。ただそれらの研究にしても、当時の段階においても垣間見られる、大陸系知識人と台湾の知識人との間に発生していた歴史認識の違いについて、明確な分析を施していないようである。本章が試みようとしたのは、実にその領域である。

ただもう一方では、彭瑞金の論文「「橋」副刊始末」(『台湾史資料研究』）呉三連基金会 第九期 1997）の「橋」副刊への解釈に見られるように、九十年代以降の「省籍矛盾」の観点のみで当時の敵対の構図を作り上げる手法には、やはり違和感を覚えざるを得ないところがある。当時の台湾は、大陸中国と一体化していたわけであり、その枠組みの中で文化統合が進行しようとしていたこと、さらに大陸における国共内戦の不利もあって、その後、台湾にやがて大きな白色テロの嵐が襲来することなど、独自の史脈から判断しなければならないことが多いのである。

その上で、台湾の「脱植民地化」と「祖国化」の交点に現れた大きな問題とは、かつての日本統治の「影」をどのように処理するか、という一大アポリアであったように思われる。大陸の知識人は、どうしても抗日戦争の経験から「日本」をイメージ化する傾向が強く、植民地統治という独自の史脈におかれた台湾の独自性を理解するのには、さらに幾ばくかの調整が必要であったと考えられる。さらに台湾側からみれば、大陸における抗日の経験がどのようなものであるのか、大陸で抗日を闘った勢力にしても、様々な出自と傾向があったことなど、その総体を理解する条件が整っていなかったと言える。

そのような文化的な磁場における調整の期間と条件が整わないまま、一九四九年四月六日、白色テロの先鞭となる台湾大学・師範学院の学生二百名余りへの一斉逮捕が為され、それと連動する形で、「橋」副刊を担っていた主筆の歌雷は大陸へと強制送還され、また楊逵などの多くの台湾知識人の先鋭的な部分が、投獄されることになったのである。

今日から見て、この二.二八事件から四.六事件にいたる道筋は、その後の白色テロによってそれを伝える人材を失うことにより、その文化的喪失の中身自体、やはり「闇」の中にあり続けるものとも言えそうである。しかしこの時期にかかわる語り難さは、単に証言者の不足だけではなく、それをどのように歴史的な評価の下に語るのかという、語りの枠組みの不足とも関連するものと思われる。これはまた五十年代、対岸の大陸(中国)において発生した知識人、文化人の政治的受難をどのように歴史的な救済するか、という課題とも踵を接しているように思われる。何故なら、両者とも、冷戦構造下(内戦体制下)における言論封殺として、同じ根から出て来た現象だからである。